

ミステリーなる神の知恵

代務牧師 齋藤 篤

聖書 コリントの信徒への手紙一2章1～16節

1:兄弟たち、わたしもそちらに行ったとき、神の秘められた計画を宣べ伝えるのに優れた言葉や知恵を用いませんでした。

2:なぜなら、わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていたからです。

3:そちらに行ったとき、わたしは衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした。

4:わたしの言葉もわたしの宣教も、知恵にあふれた言葉によらず、“霊”と力の証明によるものでした。

5:それは、あなたがたが人の知恵によってではなく、神の力によって信じるようになるためでした。

6:しかし、わたしたちは、信仰に成熟した人たちの間では知恵を語りません。それはこの世の知恵ではなく、また、この世の滅びゆく支配者たちの知恵でもありません。

7:わたしたちが語るの、隠されていた、神秘としての神の知恵であり、神がわたしたちに栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておられたものです。

8:この世の支配者たちはだれ一人、この知恵を理解しませんでした。もし理解していたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。

9:しかし、このことは、「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は御自分を愛する者たちに準備された」と書いてあるとおりです。

10:わたしたちには、神が“霊”によってそのことを明らかに示してくださいました。“霊”は一切のことを、神の深みさえも究めます。

11:人の内にある霊以外に、いったいだれが、人のことを知るでしょうか。同じように、神の霊以外に神のことを知る者はいません。

12:わたしたちは、世の霊ではなく、神からの霊を受けました。それでわたしたちは、神から恵みとして与えられたものを知るようになったのです。

13:そして、わたしたちがこれについて語るのも、人の知恵に教えられた言葉によるのではなく、“霊”に教えられた言葉によってです。つまり、霊的なものによって霊的なことを説明するのです。

14:自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません。その人にとって、それは愚かなことであり、理解できないのです。霊によって初めて判断できるからです。

15:霊の人は一切を判断しますが、その人自身はだれからも判断されたりしません。

16:「だれが主の思いを知り、主を教えるというのか。」しかし、わたしたちはキリストの思いを抱いています。

日本聖書協会『聖書 新共同訳』

わたしは衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした。

使徒パウロはこのように綴り、愛するコリント教会にある信徒一人一人へ語りました。パウロは時として、自

分自身の「弱さ」について、決して隠すことなく、大胆に語ります。大伝道者とうたわれているパウロですら、恐れに取りつかれたり、不安を感じたりすることがあるのだろうか。あるからこそ、パウロは自分の弱さをさらけ出し、それが彼を突き動かす土台となったのです。

パウロは、かつての出来事を思い出していました。コリントの地にはじめて降り立った時のことです。パウロはこの時ほど「空しさ」を感じたことはありませんでした。キリストによる命の救いを伝えているのに、こんなに空しい気持ちにさせられたことは、パウロの宣教者人生において、これまでただの一度もなかったことでしょう。まだ反対者に反対され、迫害者に迫害されるぐらいのほうが、彼にとってはまだましなことでした。反応があるだけ、まだ関心があるということだからです。しかし、どんなに語っても、自分の思いを伝えようとしても、関心を寄せてくれない。軽くあしらわれて終わり。まさに「のれんに腕押し」のような、無反応・無関心を経験することほど、パウロにとってつらいものはありませんでした。

愛の対極にあるのは憎しみではない。無関心だ。

20世紀を代表する修道女(シスター)のひとりである、マザー・テレサが残した言葉です。愛の対極にあるものは、憎しみなんかじゃない。無関心こそ愛から一番遠いものなのだ。このマザーの言葉は、まさにパウロ自身が経験したことでもありました。

パウロはコリントを訪れる前、ギリシアの都であるアテネでキリストの救いを伝えていました。アテネの中心にあるアレオパゴスの丘は、昔から「議論する場」としてよく知られていたところでした。さまざまな話題が持ち出されては、ああではない、こうでもない議論が繰り返されていたのです。そこで、パウロはいわゆる知識階級と呼ばれていた人たちを相手に、キリストの救いを語り始めたのです。

パウロにも「自信」がありました。彼は幼い頃からユダヤ教教師のもとで、律法を徹底的に学んだ人物です。法律を解釈する力、文章を読み解き、それを論理的に語る能力が彼にはありました。パウロには「雄弁」という賜物が、神から与えられていました。だから、議論好きの人々が集まるアレオパゴスの丘で、彼らの能力に十分太刀打ちできるだけの力をもって、キリストの救いを伝えることで、救いへと導かれる人が多く与えられることを、パウロは望んだに違いないのです。

しかし、結果は惨憺(さんたん)たるものでした。議論好きの人々にとっては、十字架に架けられたイエスが復活の主となられ、命の救い主となられたという話は、単に「面白い話のひとつ」にしか過ぎなかったのです。誰も本気でパウロのメッセージを真剣に受け入れようとはしませんでした。せっかくパウロを通して注がれようとしていた神の愛は、無関心という波に飲み込まれて、ただ垂れ流されるだけだったのです。神の愛が無駄に押し流されていく。この姿に、パウロは空しさを覚え、脱力してしまいます。神の愛が失われたところには、恐怖と不安だけが彼を支配していったのです。

パウロはどうして、ここまで弱り果ててしまったのでしょうか。パウロの決意の言葉から、その理由を知ることができます。1節にはこのように記されています。

兄弟たち、わたしもそちらに行ったとき、神の秘められた計画を宣べ伝えるのに優れた言葉や知恵を用いませんでした。

パウロは、アテネからコリントへ宣教の場を移したときに、ある決意をしました。「神の秘められた計画を宣べ伝えるのに、優れた言葉や知恵を用いませんでした」とパウロは語っています。ここで言う「優れた言葉や知恵」とは何でしょうか。これこそ、パウロが自信を持ってアテネの地で用いた「伝道的手段」でした。彼が幼い頃から培われてきた、博学とも言える知識や雄弁に語る話術こそ、彼の言う優れた言葉であり、知

恵でした。

しかし、パウロはそういう言葉や知恵は用いないと断言しています。彼は、そもそも神がイエスを通して果たされた命の救いというものが、どこから来ているか。そのルーツというものに注目するからこそ、自信があった自分の言葉や知恵を使わない決断ができました。それが、「神の秘められた計画」という言葉に込められているのです。パウロが人々に伝える神のご計画は、極めて秘められたものであることを明らかにしています。そのことをパウロは、7節において次のように綴っています。

わたしたちが語るのは、隠されていた、神秘としての神の知恵であり

パウロは、このコリントの街で人々に伝えるのは、私自身の知恵によってつくられた知識や言葉ではなく、神の知恵であることをはっきりと伝えています。しかも、その神の知恵とは人々の目には隠された「神秘」的な知恵であることを明らかにしています。つまり、神の知恵とは、私たちが自分たちのあいだでつくられた常識的な範囲に限定されるものではなく、私たちの想像をはるかに超えたところで働くものなのだということを、手紙の読み手に伝えたかったのです。

神の知恵は「神秘」のなかにある。この「神秘」と日本語に訳されている言葉は、新約聖書の原語であるギリシア語では「ミステリオン」という単語が用いられています。ミステリオン、つまり、英語で言う「ミステリー」の語源となった言葉です。ミステリーとは、不思議なこと、人間の知識ではどうも推し量ることができない物事に対して用いられる。つまり、神が私たちに示されるご自分の知恵とは、実に不思議なものである。つまり、今日の説教題にもあるように「ミステリーなる神の知恵」と言うことができるのです。

ここで話を戻して、どうしてパウロはアテネでの伝道の結果、ひどく衰弱してしまい、恐れと不安にさいなまれたのだろうかという問いについて、あらためて考えてみたいのです。パウロはこれまで培ってきた知識や雄弁な話術をもって、キリストを伝えようとしてきました。しかし、そこには決定的に足りないものがあつた。それが「神の知恵」であつたことにパウロは気付かされました。だからこそ、心機一転、コリントでの宣教は自分の知恵に頼らず、ただ神の知恵によってイエス・キリスト、それも十字架につけられたキリストだけを伝えようと心に決めたのでした。

考えてもみれば、世界の救い主となられた御方が、十字架刑で殺されるなどということが、私たちの社会常識ではあつてはならないことなのです。当時、十字架刑というのは、ギリシアを含む地中海一帯の世界を支配していたローマ帝国においては、最も残虐な死刑方法としてよく知られていました。どうして十字架のようなおごたらしい方法によって処刑されて殺された人間を、世界の救い主として受け入れることができようか。そんな馬鹿馬鹿しい話を、誰も受け入れるはずがない。まさにお話にならないたわ言を熱く語っていたパウロを、アテネの人々が軽くあしらひ、関心を寄せようとしなひのは、ある意味で言えば「当たり前」の話だつたことは、容易に想像できるのです。

しかし、それはあくまで「人間のあいだでまかり通つてゐる知恵」によって判断されることなのです。神の知恵というものは、極めて不思議なものであつて、私たち人間の常識に押し込めることのできない、とても自由なものである。パウロはあらためて、神のなさることに自分自身のすべてを委ねて、神の働かれる知恵によって、十字架によって命を私たちに与えられたイエス・キリストを伝えよう。人がどんなに馬鹿にしても、相手にしなくても、神の助けによって人々が救われることを心から願うように促されたのでした。

パウロにそのような気づきを与えたもの。それこそ「聖霊」の導きに他なりません。パウロは聖霊のお働きなしに、神の愛を伝えることも、それを分かち合うことも、人々が神の愛を受け入れ、自分自身の生き方とするためにも、聖霊のお働きなしに、それが実現しないことを悟りました。パウロは、続く4節および5節で、このように手紙を綴っています。

わたしの言葉もわたしの宣教も、知恵にあふれた言葉によらず、“霊”と力の証明によるものでした。それは、あなたがたが人の知恵によってではなく、神の力によって信じるようになるためでした。

神の不思議な知恵は、神が与えてくださった“霊”、すなわち聖霊のお働きによって証明されるのだと。この聖霊の助けこそが、私たちの人智を超越して、私たち一人一人に、神の力が与えられ、神の愛が豊かに与えられる。だからこそ、十字架に架けられて、そして殺されたイエスの命が、実は、私たちのために与えられた尊い命であったことに気づかされるのです。パウロはここで、ミステリーなる神の知恵と、聖霊の自由な息吹とも言える心地よいお働きを結び合わせて、私たちすべてに理解を求めているのです。

パウロがそうであったように、私たちもまた、時に神の知恵について気づくことができない場合もあります。つつい自分の慣れた方法で、これまで培ってきたやり方で、物事を済ませ、解決してしまおうとする自分自身があります。聖霊なる神が自由に私たちのために働いてくださっているにもかかわらず、そのことになかなか気付けないのです。

しかし、パウロが疲れ果て、恐れおののいていた時にこそ、聖霊は豊かにパウロを慰め、励まし、新しい人生の道を提示しながら、実に不思議な方法でご自分の知恵というものをとお与えくださいました。そういう神の助けにパウロは気付かされたのも、まさに聖霊の働きでした。これまでの自分自身を振り返り、思い起こすことによって、自分自身のあり方を見つめ、本当に大切なことを見極める力を、神の知恵は与えてくださるのです。こうして、私たちは神から新しい息吹を受けて、新鮮さをもって未来を歩む者とさせられるのです。

今日は、聖霊なる神が弟子たちに与えられたことを祝うペンテコステを記念して、私たちは礼拝の時もっています。聖霊とはなにか。私たちは考えるでしょう。自分の生活のただなかで、聖霊はどのような働きをもって、私自身に、私たちに影響を与えるのだろうか。家庭で、職場で、地域で、そしてこの北三教会で。

この後、私たちは前年度を振り返り、また今年度のために、また次年度以降の歩みのために重要なことを決定する教会総会が控えています。こういう時こそ、総会という会議が、私たちの知恵によるのではなく、ただ神の知恵によって、聖霊なる神が私たちをリードしてくださる。そんなことに希望が持てる総会でありたいと心から願います。そのために、私たちが北三教会の主にある歩みを祈りつつ、聖霊なる神の導きを是非求めてまいりたいと願います。

祈り

聖霊の助けを私たちに与えてくださった、主イエス・キリストと、そのイエスをキリストとして与えてくださった父なる神様、私たちにさまざまな気づきを、極めて不思議な方法を通して与えてくださるあなたの知恵を、私たちが生きるために豊かに与えてくださいますように。あなたの知恵によって生きる者とならせてください。

救い主、イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。